



プティン・ノミネション・フィ : パプアニューギニア南部高地における選挙運動(素描)

中野, 伸一

(Citation)

社会学雑誌, 15:107-121

(Issue Date)

1998-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010921>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010921>



プティン・ノミネション・ファイ

——パプアニューギニア南部高地における選挙運動(素描)——

中野伸一

神戸大学大学院文化科学研究科博士課程

はじめに

本稿は、パプアニューギニア南部高地州メンディ地方区において、一九九七年総選挙のさい、展開された選挙運動についての予備的報告である¹⁾。

現在のパプアニューギニアにおいては、もはや国民国家の枠組を無視して地域社会を理解することはできない。村落には徐々に貨幣経済が浸透し、紛争は国家の司法制度に組み込まれたビレッジコートにおいて調停され、行政のサービス向上を望む声は絶えず聞かれる。しかし一方では、貨幣の多くが「慣習的」賠償支払や婚資に費やされ、ビレッジコートは「慣習法」にもとづいた調停をおこない、行政サービスの分配は新たに「現代のビッグマン」を生み出している。「慣習的」(あるいは「伝統的」)諸制度・理念と国民国家の諸制度・理念との、不断の相互作用を視野に

入れなければ、地域社会の現在では理解されないのである。「慣習的なもの」と「国民国家的なもの」との交錯および相互作用は、本稿で扱う選挙運動においてもみられる。

たとえば、トレードストア(村の雑貨店)にも立候補者のポスターが貼られ、演説会が頻繁に催される一方で、立候補者の贈与によって「慣習的」賠償支払が活性化し、旧来の「豚祭」に範をとった「豚肉の分配」が催されたりもする。とりわけ本稿で重点的に記述するキャンペーンラリーは、両者が興味深い交錯をみせる場である。

ラリーとは、「伝統的」衣装で盛装した多くの人々とともに立候補(予定)者が隊列を組んで行進し、見物に集まった人々に支持を訴える選挙運動をいうが、通常「プティン・ノミネション・ファイ(Tok Pidgin: putin Nomination Fee 立候補届出のさいの登録料納入)」と呼ばれる。つまり、人々は「法的な立候補表明」を示す言葉でラリーを呼ぶのだが、実際にはラリーと立候補登録料納入のあいだに

直接の関係はなく、むしろラリーは立候補者が「現代のビッグマン」として自己を誇示する、いわば「社会的な立候補表明」なのだと考えられる。人々は「社会的立候補」をさすために、「法的立候補」を表す用語を借用しているのだ。

こうした現状は、「伝統的」政治制度を主たる研究対象としてきた政治人類学、あるいは近代国民国家や議会制民主主義の「普遍性」を主張する政治学ではなく、「慣習的なもの」(固有の政治文化)と「国民国家的なもの」との相互作用についての「現在の民族誌」を問題にする「人類学的政治研究」〔合田 一九九七〕の視点から記述・分析されるべきであろう⁽³⁾。

報告者は、政治現象についての「現在の民族誌」である「人類学的政治研究」を志すものであるが、本稿ではその前段階として一選挙区における選挙運動(とくにラリー)の実態をできるだけ忠実に記述することにつとめたい。

「慣習的なもの」と「国民国家的なもの」とを腑分けするよりも、眼前の「いままさに生起している出来事」をそのままに記述することを本稿の課題としたい。

一・一九九七年総選挙の経過

一九七五年に独立して以来、パプアニューギニアは一貫

して一院からなる議院内閣制をとってきた。国会は、各州全域を選挙区とする全州区(Regional Electorate)選出の二〇議席および、より小さな選挙区である地方区(Open Electorate)選出の八九議席より構成される。全州区、地方区双方ともに定数一の小選挙区制であり、任期は五年で解散はない。そのため、五年に一度定期的にめぐってくる国会議員選挙では国民の多くが熱狂し、約二カ月間(通常四月から六月)の法定選挙運動期間中は国中が騒然となる。

全州区選出の国会議員は州知事かねており、州行政全般に大きな権限を有している。また、各州には州議会が設置されて州予算の審議、州法の制定などにあたってきたが、地方制度改革により現在はその機能を停止していた。さらに、地方政治の末端には地方議会政府(Local Council Government)がおかれており、選挙で選ばれるその議員(Councillor 以下カンソル)が村人にとって地方行政全般の窓口になっている(以下、カンソルの選出母体を村と呼ぶ)。

一九九四年に再選されたチャン首相(人民進歩党)は、「ブーゲンビル紛争」の解決をはかって外国人傭兵部隊の投入を計画したが、一九九七年三月、国防軍司令官が傭兵会社との秘密契約の内容を暴露・非難したことによって首都ポートモレスビーは混乱に陥り、二五日にはチャン首相の

職務一時停止決議が国会に提案された。国会は一度はこれを否決したが、激高したポートモレスビーの民衆と一部軍人が国会を包囲して再審議を迫ったため、結局チャン首相は職務を停止され、代わって同党のギヘーロが臨時首相に指名された。

そして、四月一日の選挙登録料 (Nomination Fee)

納入開始によって一九九七年総選挙の火蓋が切って落とされた。おもな争点は州議会廃止の是非と汚職追放であった。新聞は連日のように選挙特集を組み、ムラには現金がとびかい、人々はキャンペーンラリーに参加し、候補者の噂に花を咲かせた。とくに高地五州では支持者どうしの衝突や暴力事件が頻発し、また、分離独立運動に揺れるブーゲンビルでは候補者の誘拐事件さえ発生した。

六月下旬におこなわれた投票 (首都地区と高地五州は一日で投票、他の州では二週間ほどの期間に投票箱が州内の各投票所を巡回した) の結果、与党の人民進歩党は首相のチャン、臨時首相のギヘーロをはじめ閣僚が軒並み落選して惨敗した。選挙結果をうけて各政党は連立工作に入り、七月二二日、国会は国民会議 (People's National Congress) 党首ビル・スケイト (首都地区全州区) を首相に選出して長い選挙戦が終了した。

人口三六、四一八八 (一九九〇年) のメンディ地方区は南部高地州に設置された八つの地方区のひとつであるが、その内部をメンディ、カリンツ、ライ谷の三「地域」に分けることができる。これらの諸「地域」からそれぞれ複数の候補者が立候補し、互いに激しく争った。ここでは、報告者の調査地であるライ谷の人々がこれらの「地域」をどのように捉えているかに留意しながらふれておきたい。

(1) ライ谷 タウン (メンディ) の西方に位置し、エング州カンデップ地方から南に流れるライ川にそって展開する渓谷。二〇の行政村を擁し、人口は二二、四八六八、人々はメンディ (ウォラ) 語のライ谷方言を話す。タウンからライ谷における行政・司法・交通の中心地ムニウまで乗合バス (一日三往復ほど) で約二時間かかる。標高が一五〇〇m以上あり、ライ川で発生する霧のため気候は冷涼である。雨期には毎日のように降雨があるが、乾期には一月以上も雨が降らない場合もある。主たる生業は、他の地域と同様、サツマイモ栽培と養豚である。

報告者の調査地のマイブ村は、ムニウから徒歩で約一時間の距離に位置する。人口は五二九八 (一九九〇年) で、公選によってカンソル一名、カンソルの推薦によってマジストレイト (Village Court Magistrate) 一名を選出している。

二. 調査地の概況 — メンディ地方区

(2) メンディ 州都メンディから北方に広がる地域。

ライ谷では政治・行政・経済の中心である州都メンディをタウンと呼んでいる。ライ谷の人々は仕事や買い物のためにタウンに出かける機会も多いが、タウンが人々にとって

「危険なよその土地」であることにはかわりがない。また、メンディ川上流域はタウン周辺とも方言が異なるので、これを上メンディ (Upper Mendi) と呼んで、タウンを含むメンディ中央 (Mendi Central) と区別する場合が多い。

(3) カリンツ ライ谷とタウンとの間の地域。タウンからライ谷に延びる幹線道路沿いに日当たりの良いなどらかな斜面が広がっている。住民はタウンとの間を頻繁に往来し、タウンで消費される生鮮野菜や果物の大部分はカリンツで生産されたものだと言われている。ライ谷は日照が悪く野菜や果物の生産に向いていないうえ消費地であるタウンからは遠く、タウンに農産物を持ちこんで販売する者はほとんどない。こうした事情でカリンツはライ谷より「豊か」だと考えられており、人々はカリンツを羨むとともに激しい対抗意識を燃やしている。

なお、メンディ語を話す人々はライ谷南方のニパを中心とする地域にも居住しているが、これらの人々はメンディ地方区に属さず、クトゥブ湖周辺に居住するフォイ(族)、ファス(族)とともにニパ・クトゥブ地方区を構成している。ライ谷の人々はニパに親近感を抱いており、たとえば全州区(州知事)選挙では、「同じ地域の仲間だから」と

いう理由でニパ出身の現州知事ディック・ムネを支持する人々が圧倒的に多い。

三. 地域主義と選挙運動

メンディ地方区の立候補者と選挙運動

次にメンディ地方区における主な立候補者と選挙運動のおおまかな経過をみておきたい。

立候補届出(登録料納入)以前の三月下旬から、立候補(予定)者たちはキャンペーンラリーを開始した。ただし、これは数カ月におよぶ長い選挙戦がいわば「仕上げ」の段階に入ったことを意味するものであって、ここから選挙運動が始まるというわけではない。立候補予定者の多くは前年末から数ヶ月にわたって、ビールや豚肉を振る舞いながら村々を歩いてきた⁽⁶⁾。そして最後の段階で広く立候補を表明するためラリーを実行するのである。

メンディ地方区では、一五人が四月一七日の締切までに、一〇〇〇キナの登録料を納入して立候補を届け出た(表)。メンディでは現職議員マイケル・ブク、元州議会議員ステイーブン・メンデポー、パプアニューギニア大学を卒業したばかりのジョージ・ウォノメらが、カリンツではハリー・コンバほか数人が立候補した。なかでも、与党人民進歩党に属して観光文化大臣も務めるマイケル・ブク、前回

図 南部高地州における選挙区

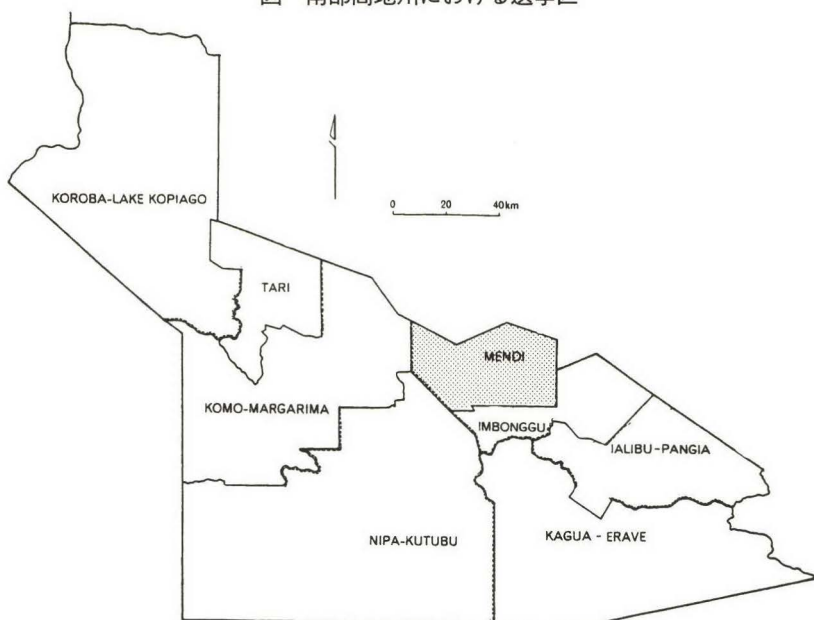


表 メンディ地方区における立候補者および得票数（1997年）

登録名 ^{*1}	所属	得票	得票率	'92得票	'92得票率	出身地域
1. Stephan Naik Mendepo ^{*2}	IND	☆7017	17.8	—	—	Mendi
2. Hun Morris	IND	4	0.0	—	—	Karintz
3. George Apsi Wonome	NA	⑤4723	12.0	—	—	Mendi
4. Andy Anda Akivi	IND	1083	2.7	—	—	Mendi
5. Norman Takis	MGA	369	1.0	—	—	Mendi
6. Harry Komba	IND	④5131	13.0	③3913	13.9	Karintz
7. Senen Alo Ess	IND	6	0.0	—	—	Karintz
8. Kiee Kila Toap	IND	437	1.1	—	—	Karintz
9. Joseph Kopol ^{*3}	IND	930	2.4	☆4029	14.3	Lai V.
10. Michael Buku Nali ^{*4}	PPP	★8299	21.1	★4627	16.4	Mendi
11. Dick Yeoki Buruma	IND	1370	3.5	—	—	Lai V.
12. Yakumu De Kewanu	NA	2906	7.4	—	—	Mendi
13. Jeffrey Hurums	PAP	368	1.0	—	—	Lai V.
14. Philipus Maso Hapon ^{*5}	IND	③5145	13.0	⑨1498	5.3	Lai V.
15. Lapun Tubiri Wagep	IND	1550	3.9	—	—	Karintz
無効票		95	0.2	29	0.1	
投票総数		39433	100.0	28259		

凡例

IND: INDEPENDENT 無所属

NA: NATIONAL ALLIANCE 国民連合

PPP: PEOPLE'S PROGRESS PARTY 人民進歩党

PAP: PEOPLES ACTION PARTY 人民行動党

★当選

☆次点

③3位

*1 本文中では登録名ではなく通称を用いた。

*2 1992年総選挙では登録名 S Mendepo で全州区に立候補した。

*3 1992年総選挙での登録名は Huli Joseph であった。

*4 1992年総選挙での登録名は Michael B Nali であった。

*5 1992年総選挙での登録名は Philipus Hapon であった。

総選挙で三位になったハリー・コンバ、前回総選挙には南部高地州全州区に立候補し一一、七六五票（六位）を獲得したステイーブン・メンデポーの三者が有力候補とみられていた。

一方、ライ谷ではマイブ村のジョー・コボル（元州職員）、ネンギア村のマソ・ハボン（元小学校教員）、クヤンダ村のジェフリー・ウルムス（もとチンブ州職員）らが立候補した。独立以来四回の国会議員選挙でライ谷出身の候補者が議席を獲得したことはなかったが、前回総選挙においてジョー・コボルが僅差で次点につけており、「今回こそライ谷から国会議員を」との期待が盛りあがっていた。

政党の公認候補は五名だったが、党首マイケル・ソマレを招いて合同ラリーを実施した国民連合をのぞけば、選挙戦における政党の存在感は希薄であった。「ラジオ南部高地」は政見放送や候補者の声明を伝えたが、たとえばマイブ村にはラジオが数台しかなく、人々の投票行動にどれほどの影響を与えたか疑問が残る。また多くの候補者が、自分が「よきキリスト教徒」であると訴えたが、教会組織が特定の候補者を支援した話は聞かれなかった。

候補者のなかで財力のある者は自動車を購入して拡声器を積みこみ、村々を遊説してまわった。タウンでもスピーカーから支持を訴えながら走るマイケル・ブクやステイーブン・メンデポー、ジョージ・ウォノメら有力候補者の宣

伝カーを見ることができた。一方、財力のない候補者はハンドマイクを携えて乗合バスあるいは徒歩で村々を遊説した。たとえば、ノーマン・タキスは、ハンドマイク片手に毎日のようにタウンに現れ、「自分が当選したら、富を独占している外国人ビジネスマンを排斥する」と演説することと有名だったが、こうした財力のない候補者に対する人々の反応は概して冷たかった。

遊説とラリーが続けられるなか、五月下旬から六月上旬には、各選挙区ごとに投票管理委員の選考および説明会が行われた。投票の準備がほぼ整った六月一三日、法定選挙運動期間は終了し順次投票が開始された。南部高地州では各選挙区とも六月二〇日に投票が行われた。

投票日翌日から行われる予定だった開票は一日遅れて開始され、四日間のべ五〇時間余にわたっておこなわれた結果、現職のマイケル・ブクの勝利が宣言された。しかし次点に泣いたステイーブン・メンデポーは、不正投票があったとして選挙の無効、やり直し選挙を求める訴訟を準備中だという。

ジョー・コボルの選挙運動

ラリー以外の選挙運動の様子をジョー・コボルを例に簡単にみておきたい。

ジョーは立候補登録料納入の直後、トヨタ4WD「ラン

ドクルーザー」を一台購入し、自らこれを運転して村々をまわった。マイブ村内外の支持者のなかには、車に同乗してジョーとともに遊説する者もあったが、五月下旬そうした支持者の一人が事故で死亡した。こうした場合、車を運転していたジョーは「慣習的」賠償支払をしなければならぬ [Silitoe 1981]。もしこれを拒否すれば、死者の家族・クランの支援は得られなくなる。十日後ジョーは、遺族に対する賠償の先行支払 (*hepa hande*) として豚七頭・現金二、二二〇キナを支払い、本支払 (*ol tenga*) として選挙終了後に豚二〇頭・現金二〇、〇〇〇キナを支払うことを約束した。

敵対関係にあった隣村トゥミヤ村との和平回復も緊急の課題であった。前回総選挙においてトゥミヤ村は村をあげてジョーを支援したが、支援の見返りをめぐる紛争が戦闘に発展し、トゥミヤ村のマーケットは焼失、双方あわせて六人の死者をだした。のちに休戦協定が結ばれたが、その後も敵対関係が続いていた。投票日直前になって、豚一二頭・現金四、〇四四キナ・五〇、〇〇〇キナの公共事業（幹線道路の拡張・清掃）の贈与で和平が回復され、トゥミヤ村の住民の多くがジョーに投票した。

ジョーは、昼間はマイブ村のムラ広場で他村の人々に現金や豚を贈与して支持を求めたり、自動車で遊説してまわったりしていたが、夜になるとそれらの村々で男子小屋に

泊まりこみ、現金や豚と票との交換の交渉に忙しかった。昼間は村のリーダーたちに「公開の」贈与をし、夜はより小規模な集団（クランや家族）に対して「秘密の」贈与をしていた。複数の対立候補が金と基礎票の交換に応じたとの噂も流れた。

地域主義

今回の総選挙には多くの候補者が立候補して各地で激戦が展開された。州議会が機能停止されて失職した元・前州議会議員が立候補したこと、キリスト教の終末思想に影響された、今回が「最後の総選挙」であるという言説が広く流布していたこと、などその理由はいくつか考えられるが、「地域主義」もその一つに挙げてよいだろう。さまざまなレベルでみられる地域主義がパプアニューギニアにおける政治の特徴のひとつとなっている。

最も「大きい」地域主義はパプアニューギニアの国土を、パプア、島嶼部、モルセ (*Morobe, Madang, Sepik* の諸州)、高地の四つに分ける考え方である。それぞれの「地域」は、首相を輩出して開発予算などの恩恵にあずかろうとする。

また、南部高地州内では、州知事（全州区選出議員）の座をめぐって地域主義が噴出する。たとえば、選挙時点での知事はニパ出身のディック・ムネだったが、彼は自分の

出身地であるニパ、および前回総選挙において彼を支持した近隣の「地域」に優先的に公共事業をわり振ったと言われている。ライ谷もそうした恩恵を受けた「地域」のひとつであった。とくにマイプ村はメンディ地方区の有力候補ジョー・コボルが全州区についてはディック・ムネ支持を表明していたこともあって、このところ毎年のように五〇〇〇キナにのぼる高額の公共事業を配分されていた。また、州政府の要職はニパ出身者で固められ、タウンの知事公邸はニパ出身者の定宿となっていた。¹¹⁾

地域主義はメンディ地方区内でもみられた。たとえば、ライ谷からは四人が立候補したが、ライ谷から当選者を出すために「票を一本化」しようとする動きが随所にみられた。地方議会政府議長や、元州議会議員が演説などで一番強調したのもこの点であり、候補者自身も他の候補者に「選挙からおりて」自分を支持するように演説会で呼びかけさせた。しかし、調整は実を結ばず、ライ谷票は他「地域」の候補者に大幅に浸食された。

また、メンディ地方区に含まれる三「地域」は、開票が始まる頃から激しく争った。開票がすすめられるタウンでは、出身「地域」の異なる人々の間で小競り合いが何度も繰り返された。また、カリンツの候補者ハリー・コンバの支持者は、ライ谷への買収が功を奏さずハリーが当選できなかったことの報復として、タウンからライ谷へ延びる幹

線道路を封鎖し、通行するライ谷の自動車を停車させて金品を強奪した。

四．キャンペーンラリー

「伝統的」衣装で盛装した大量の支持者たちが候補者とともに隊列を組んで行進し、見物に集まった沿道の人々に支持を訴える選挙運動をキャンペーンラリーという。ラリーはメンディ・タウンやタリなど「地域」の中核となる町、ムニユウなど亜地区の中心地、立候補者の出身村のムラ広場などでおこなわれる。行進にひきつづきラリーを主宰した候補者の演説で締めくくることが、応援演説が多数あったり対立候補の演説を許したりしてさながら演説会の様相を呈する。

人々は、どの候補者に投票するか決定するうえでラリーを非常に重視する。「行列に参加している人数は多いか、そのうち何割が盛装しているか、盛装している人々の衣装は美しいか」などを基準にラリーを評価し、候補者の力量をはかるのだという。

候補者の多くがタウンその他で一回ずつラリーを実施した。メンディ地方区のマイケル・ブクやステイブン・メンデポー、全州区候補のフランシス・アワサがタウンで実施したラリーは見事だったと評判になった。¹²⁾地元でラリー

をおこなった候補者もあったが、メンディ地方区、インボング地方区、南部高地州全州区の三つの選挙戦の中心地であるタウンでは、三月下旬から五月中旬まで毎週のように有力候補者のラリーがみられた。ここでは、マイケル・ブク、ステイーブン・メンデポールのラリーが実際どのように行われたかについて述べたい。

マイケル・ブクのラリー

四月三〇日、マイケル・ブクの出身村コバイルのムラ広場は、ラリーを見物に集まった人々で午前中からごったがえしていた。やがて支持者グループが続々と到着し、隊列を組んでムラ広場を行進してまわる。支持者グループには「伝統的」衣装で盛装した者もいるが、そうでない者も混じっている。

盛装した者たちは、顔を赤、黄、黒の顔料で思い思いに着色し、上半身は肌に食用油を塗って黒光りさせ、スキン・デワイ (*Tok Pilgin: skin diwai*) を腹に締め、タンケット (*Tok Pilgin: tange*) で尻を隠しているのは共通だが、頭の飾りや持ち物に違いがあるので、どの「地域」のグループか一目瞭然である。ライ谷、上メンディ、メンディ中央の各地から、幾多のグループが参加していた。それぞれのグループの先頭には背広とネクタイで「盛装」したカンソルが立って、隊列を指揮している。⁽¹⁴⁾

午後二時頃、支持者を乗せた数台の自動車とともにマイケルが登場した。群衆をかき分けてムラ広場へ自動車を乗りつけると、人々は行進をやめてマイケルの周囲に集まる。自動車の屋根に登っての

マイケルの演説は人々への感謝を表す言葉から始まった。チンブー州の妻方親族から各種食料と一七頭の豚、ライ谷その他の有力者たちから豚一頭ずつ計三頭、合計二〇頭の豚が提供されたことを報告し、マイケルはそれらの提供者に丁寧に礼を述べた。二〇頭の豚は一列に並べた杭につながれており、のちに有力者達に贈与された。

マイケルの演説は政策を述べるというよりもひたすら自分への支持を訴えるものだった。マイケルのあとには、ヤンティン・コロバ (全州区の候補者でマイケルと提携)、エビ・ワリ (ライ谷地方区選出の元州議会議員) などがマイケル支持の演説をした。これらの演説が続いている間もムラ広場の一角ではダンスが続いていた。

演説の後、マイケルを中心にして食物の分配が始まった。まず、広場の中央に山と積まれたサツマイモ、サトウキビ、バナナなどが一一の均等な小山に分けられる。これらは、「豚肉の分配」ののちに各支持者グループに配られた。次に、調理済みの豚肉が次々と運びこまれた。豚肉は半身および背骨周辺の二種類で、近隣の支持者の家で調理されたものらしい。この日調理されて分配された豚は合計五八頭にのぼったという。運び込まれた豚は広場中央にバナナの葉を敷いたうえに整然と並べられた。

いよいよ「豚肉の分配」⁽¹⁵⁾が始まる。マイケルに名前を呼ばれると広場中央に進み、マイケルが選んだ半身をうけとる。なかにはマイケルの選んだ肉に不満を示し、自分で選ぶ者もいた。豚肉を受け取るのはカンソルが多かった。肉は相当重く、盛装の衣裳のままの若者が介添役をひきうけ、群衆をかき分けて後方へ運び込む。肉は群衆の後方へ運び込まれたのち、その場でただちに解体して分配される。肉が少なくなってくるにつれ人々はざわめきたち、最後

には分配の仕方に不満をとえる者もあった。

午後六時にはあたりは夕闇に包まれる。報告者と三人の同行者はコバイル村のある家に泊めてもらった。同行者の一人が宿の交渉を始めると即座に快諾を得られ、「伝統的衣装」で盛装した家の主人は自分はその家に寝て自分のベッドを空けてくれた。

翌日早朝、人々は日の出前にコバイルを出てタウンに向かって歩き始めた。タウンへ向かう道筋はラリーの行進に参加しようとする人々であふれかえっている。その人々を押しつけるようにして、マイケルによって貸し切られた乗合バスが、支持者を満載して人々を追い抜いていく。タウン入口のテンテ村では、ムラ広場のほかに某会社の所有地も開放され、多くの人々が衣裳を整えたりして準備に余念がない。

午前一〇時頃からマイケルのラリーが始まった。盛装したグループはいくつあったかわからないほどで、壮麗な行進が町をねり歩いた。どこで用意されたのか馬まで行列に加わっている。マイケルは有力な支持者とともに行列の先頭に立って人々に手を振る。ライ谷のカンソルと村人たちの隊列は行列の最後尾を飾った。ライ谷の二〇人のカンソルのうち一七人が参加しているとの話だったが、全員が揃いのスーツに身を固めていた。

タウンでは対立候補のデイ・ケワヌが、政府の汚職を激しく糾弾する演説をしていた。彼は、行列が通り過ぎる間も激しい演説を続けた。が、マイケルの行列は素知らぬ顔で通り過ぎていき、衝突も小競り合いも起こらなかった。行列がタウンを一周したあと、飛行場に隣接する広場で演説が催された。しかし、マイケルは少し演説しただけで「他に話したい人があるようだから」と言ってそそくさ

と演説会場を抜け出し、あとはデイ・ケワヌと、ジョージ・ウォノメの女性支持者に譲った。

ステイブン・メンデポのラリー

翌週にはステイブン・メンデポのラリーが行われた。準備が進められるテンテ村のムラ広場には大きなテントが張られてあり、前夜はそこでダンスパーティー (Tok Pidgin: *singsing*) があったという。ステイブンの出身村ボンガイでも、前日の午後三時ごろからダンスパーティーが開かれ、サツマイモ、サトウキビ、コメ、魚の缶詰などが振る舞われたが、「豚肉の分配」はなかったという。ある支持者によれば「豚肉の分配をすると参加者から不満がたくさん出て収拾がつかないので、ステイブンは大量の豚を『殺す』だけの十分な財力はあるのだが、あえてそれをしなかった。集まった人々はみんな納得した」のだという。

ステイブンのラリーも、美しく着飾った大量の人々が勇ましく練り歩く点で、マイケルのそれと同程度に見事だった。マイケルのときには馬が登場していたが、こちらは火喰鳥の人形だった。ラリーの隊列はタウンの目抜通を練り歩いたあと、広場での立合演説会に移っていった。

ステイブンの演説は長々と続いたが、政策らしきものとして主張したのは無償教育実現と開発の推進だけで、あとはひたすら自分への支持を訴え続けた。また、議席を獲得すれば毎年七〇〇、〇〇〇キナ予算がつくので、これをライ谷、カリンツ、上メンディ、メンディ中央に分配するという。さらに、選挙運動期間中、ステイブンの支持者の家では無料で食物を提供するのでぜひ立ち寄るよ

うにとすめる。彼は演説中「papa blong yu (Tok Pidgin あなたたちの父)」というフレーズを多用した。「なにか困ったことがあったら父(自分)のところへ来なさい」というのである。マイケルが「pikini blong yu (Tok Pidgin みなさんの子)」と強調して聴衆に自分への支持を依頼したのと対照的だった。自分の演説を終わるとステイブンも他の候補者に演説を許した。しかし、マイケルの場合と違ってメンディ地方区の候補者は一人もいなかった。全州区候補者のネルソン・ワイマ、ボール・マサなどが、ステイブンへの謝辞を述べて演説をした。

おわりに

一般的に、ラリーはプティン・ノミネション・ファイ(立候補登録料納入)と呼ばれており、ラリーの後に候補者が選挙管理委員会に立候補登録料納入し、立候補を届け出ると考えられている。しかし、立候補登録料納入とラリーに直接の関係はなく、立候補登録料は選挙管理委員会が定めた期日に候補者が単独で(あるいは少数の支持者をともなつて)納入するのが一般的である。人々は自分の票を「有効に活用する」ことに腐心していたようだった。つまり、当選できそうな候補者に一票を投じることで候補者に貸しをつくり、候補者から見返りを得ることを期待しているのである。支持者や一般の人々にとってラリーは、立候補者のビッグマン・シップをみきわめる絶好の機会であり、

人々は首尾よくビッグマン・シップを発揮できない立候補者を軽蔑しさえする。

一方、立候補にとってラリーの目的はビッグマン・シップを誇示することにあると思われる。彼らは多くの人々を動員する力を誇示する。また、富の分配は「伝統的」ビッグマンの最も重要な任務であった。不平不満をもとめせず「豚肉の分配」を敢行するマイケルの姿や、自分が分配者であることを強調するステイブンの演説は、「現代のビッグマン」たろうとする候補者にとっても分配の任務が依然として重要であることを示しているよう。

また、ラリーは直接には票に結びつかない種々の雑多な活動を含みこんでいる。たとえばラリー前日、あるいは前夜にはダンスパーティーが開かれるのが常であり、ときには候補者や支持者の演説を無視してダンスが続けられることもある。また、夜半にはしばしば「キリン・シップシブ(Tok Pidgin: kilin shipshib 羊殺し)」と呼ばれる男女のレクリエーションがおこなわれる(「羊」は若い女性をさす)。若い女性が「盛装して」行進の隊列に参加することとは、恋人探し・夫探しの意味も帯びている。ラリーのこうした複合的性格を見逃してはならない。

本稿は、選挙運動とりわけキャンペーンラリーに焦点を絞って、その詳細な記述と若干の考察をとおして、メンディ地方区における政治文化の一端を理解しようとして

きた。報告者の次の課題は、一連の出来事を通じて投票・開票についての「現在の民族誌」に挑戦することである。

註

- (1) 報告者は、一九九七年四月中旬から七月中旬までの三ヶ月間、パプアニューギニア南部高地州ライ谷亜地区マイブ村において、住民の選挙運動についての人類学的調査をおこなった。本稿はこの調査で得られた資料の一部を整理したものである。調査を承諾していただいた候補者の Joseph Kopol 氏、Michael Baku Nali 氏、Stephan Mendepo 氏、調査に協力してくださったマイブ村のみなさん、報告者を家族同然に迎え入れてくださった Santis Epi 氏と Wenol Tom 氏、また現地の貴重な情報をご教示いただいた青年海外協力隊員の山本真史氏に、この場を借りてお礼を述べたい。
- (2) 住民間の紛争の多くが、法律 (Village Court Act) にもとづいて設置されたビレッジコートにおいて調停される。同法では、ビレッジコートの運営を担うマジストレイト (Village Court Magistrate) は、パプアニューギニアの「伝統」である「調停による紛争解決」を、法律ではなく「慣習法」にもとづいておこなうとされている。
- (3) 合田は、社会人類学における政治研究の視点として、王制や原始国家の形成までを主な研究対象としてきた「政治人類学」(政治制度の進化論的アプローチ)、人類学的研究や言説の政治性を問題にする「人類学」(政治性研究) (反省論的アプローチ)、「人類学的政治研究」の三つを指摘したうえで、
- (4) 「人類学的政治研究」を「『民族』と『民族』」、「『伝統社会』と『国民国家』が、互いを『他者』として、その『他性』に向き合うことで起る相互作用、とりわけ、固有の政治文化が、国民国家や民主主義といった理念とどのような相互作用を起し、新たな自己意識を形成するか、そのことをどのように自己言及するのか、政治システムはどのように脱構築されてきたかといった点に関する『現在の民族誌』を問題にする新・構造機能主義的アプローチ」と規定した。[合田一九九七・一三四—一三五頁]
- (5) 合田の趣旨を敷衍すれば、「人類学的法研究」を構想することも可能であろう。とくにパプアニューギニアにおいては、「慣習的」制度(固有の法文化)と「国民国家的」司法制度の相互作用の場がビレッジコートとして制度化されているので実現の可能性があると思われる。
- (6) パプアニューギニア高地における政治現象に関する「現在の民族誌」の先駆的業績としては、[Strathern 1971] [畑中一九七五] などがある。
- (7) 一連の「クーデター」の経緯については、[佐藤一九九七] が詳しく紹介している。
- (8) 報告者が一九九六年九月から一〇月にかけて当地を訪れたときには、はやくも村々をまわり始めている立候補予定者があった。
- (9) ヤシ [Yasi 1996] はインボング地方区(南部高地州でメンディ地方区に隣接する選挙区)の一九九二年総選挙を分析したさいに、これらの要素を重視している。

(8) ジョー・コボルの選挙運動については、稿を改めて論じる予定なので本稿では詳しく触れない。

(9) 江戸は、「ワントク（原義からは同一言語を話す人々を単位とした伝統的な集団）主義」と「地域主義」が、「分離独立主義」とともにパプアニューギニアの国家統合における「遠心力」だと規定している[江戸 一九九三]。

(10) 調査中、白人との接触が最も遅かったという意味で南部高地州は「最後の州（the last province）」だと説明されることが多かったが、これはチャン首相が島嶼部（ニューアイランド州ナタナイ選挙区）出身のため政府の施策がいつも最後に回される、という人々の不満の表現でもある。

チャンのほかに、マイケル・ソマレ（1975-80, 1982-85）、バイアス・ウィンティ（1985-88）、ラビー・ナマリウ（1988-92）の三人が首相を務めたが、それぞれソマレはモマセ（東セビック州全州区）、ウィンティは高地（西部高地州全州区）、ナマリウは島嶼部（東ニューブリテン州ココポ選挙区）の選出であった。

(11) 四つの地域のうち、首相を輩出することによって得られる恩恵に預かっていないのがバプア地域であり、バプア地域に属する首都ポートモレスビーでは、今回の選挙で「ぜひバプア人首相の実現を」という運動が盛り上がりつつあった。

開票なかばの六月下旬には、伝えられる劣勢にいらだった知事公邸のディック・ムネ支持者たちが警備のため駐留している国防軍兵士に悪口を吐き、怒った国防軍兵士が公邸内に乱入、威嚇のため機関銃を乱射するという事件さえおこった。

開票の結果、全州区ではタリ出身のアンダーソン・アギルが勝利して知事の座を獲得し、ニバの人々は公邸を去ってタリの人々がメンディに現れることとなった。

(12) なかでも、立候補登録料納入締切直後にタウンンでおこなわれたフランシス・アワサのラリーには、国民連合（National Alliance）党首で、バプアニューギニア独立時を含めて二度の首相経験者であるマイケル・ソマレが参加したこともあって全国紙二紙の記者が帯同しており、新聞でも大々的に報道された。

(13) 全州区候補者のディック・ムネはニバ、同じく全州区候補者のアンダーソン・アギルはタリと、それぞれ自身の地元でラリーを実施した。ライ谷からメンディ地方区に立候補した三候補者は、ライ谷の中心地であるムニューウで合同ラリーをおこなった。同じライ谷の候補でありながらジョー・コボルだけはこれに参加せず（演説会のみ参加）、一週間後、彼個人のラリーをムニューウでおこなった（このときの演説会には他の三候補も招かれた）。

(14) カンソルが行進に参加して支持を表明しても、必ずしも村全体の支持を表すとはかぎらない。また、支持していないカンソルであってもラリーには参加して行進しているようだった。たとえば、トウミヤ村のカンソルは、必ずしもマイケルを支持していたわけではないが行進には参加していた。トウミヤ村では、カンソルを含めた多くの人々が、最終的にマイプ村のジョー・コボルを支持して彼に投票した。

(15) 報告者は四回のラリーを実際に見聞したが、大規模な「豚

肉の分配」をおこなったのはマイケルのみであった。彼は投票日直前にもタウンで大規模なパーティーを開き豚肉を分配した。

(16)

新聞紙上ではチンブー州で立候補した女性候補が話題呼んだが、高地社会では政治は男の領域とみなす傾向が強く、女性が表示だって選挙運動に参加することは珍しい。メンディ地方区では女性立候補者はなかったうえ、筆者の知るかぎり、選挙運動をしていた女性はこの女性ただ一人であった。彼女は、最近パプアニューギニア大学を卒業したばかりで、同窓のジョージ・ウオノメを支援して、毎日のようにタウンを演説しながら選挙カーで流していた。演説の内容は、女性の地位向上、子供たちの未来のための環境整備(教育の充実)などが主であった。

(17)

支持者が金を出しあつて立候補登録料を用意したり、候補者と支持者が行列を組んで立候補登録料を払い込みに選挙管理委員会を訪れた事例が新聞で報道されていたが、メンディ地方区ではそのような事例は聞かれなかった。

参考文献

- 江戸淳子 一九九三 「オセアニアの国家統合の諸形態」 清水昭俊・吉岡政徳(編)『オセアニア3 近代に生きる』東京大学出版会、一五五—一七〇頁。
- 紙村徹 一九九七 「村長ガウイの村落開発戦略について——パプアニューギニア セビック州ブラックウォーター川上流域カニンガラ村の事例」 森部一・水谷俊夫・大岩碩(編)『変貌する社

会 文化人類学からのアプローチ』ミネルヴァ書房、二二八—二五一頁。

熊谷圭知 一九八八 「タイム・パルス・イ・カム・パプアニューギニア、ミアンミン族における西欧世界との接触と社会変容」『阪南論集 人文自然編』二三巻四号、一一—二〇頁。

合田涛 一九九七 『イフガオ——ルソン島山地民の呪詛と変容』弘文堂。

佐藤裕一 一九九七 「ポートモレスビーの『クーデター』とエンガ社会の反応」日本オセアニア学会『NEWSLETTER』五八号、一一—九頁。

畑中幸子 一九七五 「調停者は誰か ニューギニア高地における文化変容の研究」『民族学研究』四〇巻一号、一六—三四頁。

吉田正紀 一九七四 「ライ溪谷の豚祭り」『史苑』三四巻一号。

Lederman, R. 1984 Who Speaks Here? Formality and the Politics of Gender in Mendi, Highland Papua New Guinea. in D.L. Brenneis and F.R. Myers (eds) *Dangerous Words: Language and Politics in the Pacific*. New York: New York University Press.

Oliver, M. (ed) 1989 *Eleksin: The 1987 National Election in Papua New Guinea*. Port Moresby: University of Papua New Guinea.

Sillitoe, P. 1981 Some more on War. in R. Scaglion (ed) *Homicide Compensation in Papua New Guinea: Problems and Prospects*. Port Moresby: Law Reform Commission of Papua New Guinea.

Strathern, A. 1971 To Choose a Strong Man: The House of Assembly Elections in Mil-Dei, 1968. *Oceania* 41 : 136-147.

The Independent State of Papua New Guinea 1997 *Instructions to Presiding Officer: The Organic Law on National Elections*.

Yasi, J. 1996 The Election in the Imbongu Open Electorate. in Y. Safu (ed) *The 1992 PNG Election: Change and Continuity in Electoral Politics*. Canberra : Australian National University.